

深イ〜話!

No.16

長崎県の時津町に、打坂(うちさか)という急勾配の坂があります。戦後まもない昭和 22 年のこと、地元長崎自動車のバス(当時は木炭車でした)が、乗客を乗せて、この坂を登っていました。

坂の半ばに差しかかったとき、突然エンジンが故障し、バスは止まってしまいました。運転手はすぐにブレーキを踏んでエンジンを掛け直そうとしましたが、ブレーキが利かない。補助ブレーキも前進ギアも入りません。バスはそのままズルズルと後退し始めたのです。

そのバスには、鬼塚道男さんという 21 歳の若い車掌が乗っていました。運転手は彼に大声で、

「鬼塚、すぐ飛び降りろ。棒でも石でも何でもいい、車止めに放り込んでくれ!」と指示しました。

鬼塚さんはすぐに外へ飛び出し、目につくものを車輪に向かって片っ端から投げ込みました。しかし、バスは止まりません。

乗客のほとんどは、原爆症の治療に通うお年寄りと子供たちで、脱出はとても不可能です。

その間にもバスのスピードは見る見る上がっていきます。

坂の下は崖でした。ガードレールもなく、落ちればバスは大破します。

崖まであと 10 m、5 m……。

全員が観念したところで、バスは奇跡的に止まりました。

我に返った運転手は、鬼塚さんがいないことに気づきます。まだ車止めになるものを探しているのかと思い、乗客といっしょに探し始めます。

ふと、バスの後ろのほうを見て、思わず息をのみました。

そこには何と、後車輪に身を投げ、自ら車止めになっている鬼塚さんの無惨な姿があったのです。

内臓破裂ですでに息を引き取っていました。

貧しい時代で何もしてあげることができず、また、鬼塚さんの死は、一部の人にしか語り伝えられなかったため、次第にその出来事は忘れ去られようとしていました。24 年後、乗客の証言に基づいて、その事件が小さな新聞記事になりました。それをたまたま目にした長崎自動車の社長は、大変なショックを受け、「こんな立派な社員がいたことを、我々は忘れてはいけない。」と、打坂のそばに記念碑とお地蔵さんを建てて鬼塚さんを供養することを決め、今でも供養祭は続いています。